



「小金沢君をあぶない目にあわせたお詫びよ。わたしの口ですっきりさせてあげるわ。それにこんなになってるってことは、小金沢君も少しはわたしに魅力を感じてくれているわけでしょ」

すがるような目で見つめられると、真也は全身が身震いするほど興奮してしまふ。

「も、もちろんです。先生はとっても綺麗だし。それに、先生の身体はすごくいやらしいもの」

「うふふ。そんな台詞も言うのね。ずいぶんイメージが違ふわ。でも、うれしい。

小金沢君が飲んでくれて」

うっとりとした表情を浮かべ、ぺろりと唇を舐めると、友紀は真也の股間でそそり勃っているものに、チュツと音を鳴らしてキスをした。

そして、アイスクャンディーでもしゃぶるように、肉棒を口のなかに呑みこんでいく。

「うう……。先生……。すごく気持ちいいよ」

熱い粘膜にぬるぬると締めつけられて真也は低くうめき、快感のほどを友紀にぶつけるように、上から腕をまわして、すくいあげるようにして両手で乳房を揉んだ。

「うツ……。ううん……」

真也の愛撫に反応して友紀の身体がピクンと震える。その反応がうれしくて、真也はやわらかく張りのある乳房を揉みしだきつつけた。

乳房を揉まれるにまかせながら、友紀はじゅるじゅると涎れをすする音をもらし、首を上下に動かしつつける。

ガツガツした様子は、まるで飢えた獣が獲物を食らっているみたいに見える。

その獲物は自分のこの勃起した肉棒なのだ。多岐川友紀がそんなにまで飲んでくれるのが真也はうれしくてしかたない。

さらに熱い口腔粘膜がぬるぬると締めつけ、真也は下腹部が熱くしびれるほど快感を感じてしまう。

油断すると、このまま射精してしまいそうだと。

だが、若い好奇心はこの程度では満足できない。こんな幸運はそうそうないはずなのだ。できることなら、もっといろんなことをして楽しみたい。

上から見おろすと、四つん這いになって肉棒を無心にしゃぶっている友紀の突きあげたヒップが左右に揺れている様子がなんとも悩ましい。

くびれた腰からヒップにかけてが、綺麗なハート型を描いていて、濃紺の競泳水着が尻の割れ目に食いこんでいるのである。

完全に脱いでしまわず、Fカップの乳房だけを剥きだしにした姿がいやらしいと思
ってそのままにしていたが、やはり最終的には真也の興味は徐々にそちらのほうに移
っていく。

肉棒をしゃぶられたまま、真也は友紀の双臀を撫でまわし、お尻の割れ目に添うよ
うにして股間に指先をすべらせた。

「うっ……」

水着越しに指先が肉裂に触れた瞬間、ピクンとお尻を震わせ、肉棒を咥えたまま友
紀が上目遣いに真也を見あげた。

「先生のおそこが見たいんです」

真也が弁解するように言うと友紀は肉棒をいったん口から出し、その唾液まみれの
ものに頬ずりしながら少し考えこむように唇を噛んだ。

「いいわ。こんな中途半端なことじゃ小金沢君も満足できないでしょうし、わたしも
スポーツマンの端くれだから、はつきりしないのは大嫌いなもの」

友紀はその場で立ちあがり、腰のあたりまでずりさげられていた水着を自ら脱ぎ捨
てた。

「あああ、綺麗です……。先生の身体、すっごく綺麗です」